



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                               |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 日本語の名詞述語における複合動詞由来の転成名詞用法                                                                     |
| Author(s)        | 中村, 真衣佳                                                                                       |
| Citation         | 研究論集, 20, 91 (左) -110 (左)                                                                     |
| Issue Date       | 2021-03-31                                                                                    |
| DOI              | <a href="https://doi.org/10.14943/rjgshhs.20.l91">https://doi.org/10.14943/rjgshhs.20.l91</a> |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/80784">https://hdl.handle.net/2115/80784</a>             |
| Type             | departmental bulletin paper                                                                   |
| File Information | 06_rjgshhs_20_p091-110_l.pdf                                                                  |



# 日本語の名詞述語における複合動詞由来の 転成名詞用法

中 村 真衣佳

## 要 旨

本稿では、現代日本語の名詞述語文において属性叙述に解釈されるものと事象叙述に解釈されるものが存在するのはなぜかという問いに対して、名詞述語文の述部が複合動詞由来の転成名詞である例を対象に分析・考察する。分析の観点には、複合動詞〈V1+V2〉におけるV1の自動詞・他動詞の区別、V2の活用の有無、本動詞・補助動詞の区別、そして、名詞述語文における主語標示と主題表示である。主な主張は、名詞述語文の意味には静態の意味と動態の意味があることである。静態的な意味には、恒常的属性、非恒常的属性、状態（「時間の経過で変化する状態」と「動作主の意志的な動作により変化する状態」）があること、動態の意味には中立叙述、過去・非過去における事象、習慣的事象があることを指摘する。また、複合動詞の構造と文の意味の関係は、複合動詞〈V1+V2〉のV2が補助動詞であるのか、本動詞であるのかによって異なることも合わせて指摘する。

## 1. はじめに

現代日本語の叙述類型において、名詞述語文は属性叙述であり、動詞述語文は事象叙述であるという定説がある（佐久間 1941, 三上 1953 など）。例えば、(1) は述部の名詞「日本人」が太郎の属性を表している属性叙述文である。(2) は動作動詞「歩く」が動作主である花子の動作を表している事象叙述文である。

前提として名詞述語文の述部を構成する要素について述べる。典型的な名詞述語文は、(1) のように〈A は B だ/です〉〈A が B だ/です〉の述部 B に名詞が配置される。しかし、実際の言語運用では、名詞に限らずに多様な品詞、形態、語構成、連体修飾句を配置することができる。

本稿では名詞述語文の述部が複合動詞由来の転成名詞（以下、複合動詞と記す）である場合

に注目する。(3a)(4a)は複合動詞が述部となる名詞述語文である。(3a)(4a)の述部はともに「立ち食い」という複合動詞であるが、名詞述語文の意味としては、(3a)は属性叙述であり(3b)に置き換えられる。一方で(4a)は(4b)に置き換えられることから事象叙述であると考えられる。

主語標示の「が」と主題標示の「は」について述べる。(1)は属性叙述文として文脈を設定しなければ「が」は不自然である。例えば、「誰か日本人の方いますか?」のように呼びかけられている場面では「が」になる。(2)は話し手の目の前で花子が走っているのを見ている場合は「が」のほうが自然であるが、「花子は何しているの?」と聞かれて答える場合などは、「は」になる。つまり、動詞述語文において主語を「が」で標示すると事象叙述文としての意味合いが顕著に表れる。典型的な名詞述語文では主語が「は」で標示され属性叙述文となるのに対して、典型的な動詞述語文では主語が「が」で標示されて事象叙述文となる。しかし、(4a)に関しては名詞述語文の形式であるにも関わらず、上記の規則から逸脱していて「が」が最も自然で、「は」になると不自然である。また、(4a)は意味的にも事象叙述文のように解釈できる。このことから、従来の「名詞述語文は属性叙述であり、動詞述語文は事象叙述である」という二極化した捉え方に反する例として(4a)が挙げられる。

- (1) 私 {は/#が} 日本人だ。
- (2) 花子 {は/が} 走っている。
- (3) a. 駅のホームの蕎麦屋 {は/#が} 立ち食いだ。  
b. 駅のホームの蕎麦屋は立ち食いの蕎麦屋である。
- (4) a. 駅のホームの蕎麦屋でサラリーマン {??は/が} 立ち食いだ。  
b. 駅のホームの蕎麦屋でサラリーマンが立ち食いしている。

では、名詞述語文において属性叙述に解釈されるものと事象叙述に解釈されるものが生じるのはなぜだろうか。本稿では、名詞述語文の述部が複合動詞である例を対象として、語構成と主語標示の観点から分析・考察する。そして、名詞述語文の意味に作用する要因が述部の複合動詞〈V1+V2〉におけるV1の自動詞・他動詞の区別、V2の活用の有無、本動詞・補助動詞の区別と主語標示にあることを主張する。また、文の意味についても類型化する。

本稿の構成は、以下のとおりである。第2節では先行研究について述べる。第3節では静態的な意味を持つ名詞述語文について、第4節では動態的な意味を持つ名詞述語文について述べる。第5節では、述語となる複合動詞由来の転成名詞について統語的に語構成と意味の観点から分析する。第6節は結論である。

## 2. 先行研究

先述した通り、現代日本語の叙述類型において、名詞述語文は属性叙述文であり、動詞述語文は事象叙述文であるという定説がある。佐久間（1941）は、述語に動詞を要求し事件の成り行きを述べるという役目に応じるものを「物がたり文」、述部にコピュラを要求し物事の性質や状態を述べたり、判断を言い表したりするものを「品さだめ文」と呼んだ。三上（1953）は、「事象の経過を表すもの」を「物がたり文」に相当する動詞述語文とし、「事物の性質を表すもの」を「品さだめ文」に相当する名詞述語文とした。

しかし、名詞述語文と動詞述語文の機能に属性叙述と事象叙述の対立があるという指摘（佐久間 1941, 三上 1953 など）に対して、近年では意味的観点から機能間の連続性が指摘されている（益岡 2008, 影山 2012, 益岡 2016 など）。益岡（2008）、影山（2012）では、属性叙述文と事象叙述文を時間的に変化・展開するかという意味的な基準により区別している。益岡（2008）、影山（2012）は、事象叙述文は時間の推移によって展開（発生・継続・終了）する出来事や状態を表す文であり、属性叙述文は時間が経過しても展開せず恒常的に持続する性質（属性）を述べる文であると述べている。この観点から（4a）について説明すると（4a）は名詞述語文という形式ではあるものの意味的に考察すると動作の開始、動作の途中、動作の完了という時間の推移に沿って展開する事象叙述文である。したがって、名詞述語文の意味領域には属性叙述から事象叙述までの幅があることが指摘できる。

益岡（1987, 2000, 2004, 2008）の一連の研究では、静態の意味（属性叙述）を表す形式が名詞述語文だけではなく、動詞述語文にもみられることはすでに指摘されている。具体的には、以下のような例と説明がある。「彼はしばしば人前で泣く」は習慣属性であり可変的属性を表すが、「子供はよく泣く」は習慣というよりは習性を表すことになり品質的属性を表す「子供はよく泣くものだ。」と類義的である（益岡 2004：7-8）。つまり、益岡（2004）は「属性叙述」という意味機能を表す形式としては動詞述語文である場合もあり、名詞述語文と動詞述語文には連続性があると指摘している。本稿では、益岡（2004）が「属性叙述」を通じて名詞述語文と動詞述語文の連続性を指摘したのとは反対に、「事象叙述」を通じて名詞述語文と動詞述語文の連続性を分析・考察する。そのように考えるのは（3）（4）に示したように、名詞述語文も静態の意味から動態の意味を示すことができることが予測されるからである。

動詞述語文と名詞述語文の意味的な対応に関して、加藤（2016）は「通常の動詞文は事象叙述文になり、動きのありさまを鮮明に描写するのに対して、名詞文は属性叙述文になり、動きのない状況・状態を淡々と伝えることになる（加藤 2016：181）」と述べたうえで、（5a）（5b）を挙げている。加藤（2016）は、動詞述語文に対応するかたちで名詞述語文が使用されることがあることに触れ、（5a）（5b）の述部にある「到着」「販売」の語義に動詞の意味と機能が残存していることで（5b）が可能となっていると分析している（加藤 2016：181）。

- (5) a. この電車はまもなく新宿駅に到着します。/店頭で限定商品を販売しています。  
b. この電車はまもなく新宿駅に到着です。/店頭で限定商品を販売(中)です。

(加藤 2016 : 180)

加藤(2016)の指摘から、述部に置かれる語の性質が1つの要因となり、文の意味と機能を決定づけていることが予測される。

以上の先行研究により、名詞述語文には主に2つの問題点があることが指摘できる。1つは、これまで属性叙述として考えられてきた名詞述語文には、事象叙述を表す事例があるということ、2つ目は名詞述語文において動態性に傾いている事例は述部の語彙的な性質が文の意味に作用しているということである。次節以降、述部が複合動詞の名詞述語文を対象に分析・考察をしていく。

### 3. 名詞述語文の静態的意味

#### 3-1 恒常的属性

事象叙述と属性叙述については、すでに述べたように以下のように考えられている。事象叙述文は時間の推移によって展開(発生・継続・終了)する出来事や状態を表す文であり、属性叙述文は時間が経過しても展開せず恒常的に持続する性質(属性)を述べる文である(益岡 2008, 影山 2012)。しかし、上記の定義において属性叙述文と事象叙述文を区別するとすると、(6)(7)に示した主語の属性を表す文が属性叙述文であると判断されなくなってしまう。なぜなら、「主夫」「独身」は、時間の推移によって展開して終了する可能性があり、(6)(7)のように時間副詞との共起も可能であるからである。(6)(7)は、(8)のようななどの文脈においても不変的な解釈のみ生じる恒常の真理を表す属性叙述とは区別して考えることができる。つまり従来、属性叙述と考えられてきたものには恒常的ではない事例がある。本稿では、(8)のような例を恒常的属性叙述、(6)(7)のような例を非恒常的属性叙述と呼ぶことにする。

(6) 今日太郎は主夫だ。

(7) 今のところ太郎は独身だ。

(8) 太郎は北海道生まれだ。

そこで本節では、名詞述語文の述部が複合動詞の場合に恒常的な属性叙述を表すことができるかを考察する。恒常的ではない属性と時間の経過により失われる属性を区別するならば、範疇化の意味を表す場合が恒常的属性になると考えられる。例として挙げた(9a)「立ち乗り」(10a)「立ち飲み」(11a)「作り置き」は、主語を1つの範疇に分類する意味を持つ。(9a)は「電

動スケートボード」を「立ち乗り」という範疇に分類していることを表し、(10a)(11a)においても同様に「この居酒屋」を「立ち飲み」、「この夕食」を「作り置き」という範疇に分類している。これらは(9b)(10b)(11b)に示すように動詞述語文に転換する際は軽動詞「スル」が用いられ、「立ち乗る」「立ち飲む」「作り置く」という形態が習慣的に使用されることがなく、〈V1+V2〉におけるV2が動詞の活用を失っている。しかし、この活用を失っていることが名詞性を強め直接的に名詞述語文の意味に作用し静態的な意味である属性叙述を表しているとは言い切れない。なぜなら、(12)(13)の例をみると同じ複合動詞でも文脈によっては動態的解釈が可能であるからである。

それでは、(12)の「立ち食い」(13)の「立ち乗り」が動態の意味を持つのはなぜだろうか。その要因として考えられるのは、複合動詞〈V1+V2〉のV1とV2の意味的な関係である。「立ち食い」「立ち飲み」「立ち乗り」のような類は、全て「立ちながらV2する」という動作の付帯を表し、この意味により動態的な解釈も可能となっていると考えられる。

ではその一方で、(9a)(10a)に静態的な属性叙述の解釈が生じるのはなぜだろうか。それは、「食べる」「飲む」「乗る」といった動作は通常は座って行うことであることから、その動作を立ちながら行うことで有標的な意味が生じて「立ち食い」「立ち飲み」「立ち乗り」が事物を範疇化する機能を持つことができると考えられる。「??座り食い」「??座り飲み」「??座り乗り」とは言わないのは「食べる」「飲む」「乗る」という動作は座って行うことがほとんどであり、取り立ててこのような動作を表現する言葉が必要とせず、意味的に無標の動作であるためである。つまりこれらは名詞化して名付機能として使用する必要性が低い動作である。

- (9) a. 電動スケートボードは立ち乗りだ。
- b. 電動スケートボードに(??立ち乗る/立ち乗りする)。
- (10) a. この居酒屋は立ち飲みだ。
- b. この居酒屋で(??立ち飲む/立ち飲みする)。
- (11) a. 今日の夕食は母の作り置きだ。
- b. 今日の夕食は母が(??作り置く/作り置きする)。
- (12) 駅のホームの蕎麦屋でサラリーマンが立ち食いだ。(再掲(4a))
- (13) 白バイが追跡しているのは立ち乗りのバイクだ。

ところが、(11a)「作り置き」に関しては、異なる振る舞いを見せる。(14a)はかなり不自然であり、(14b)に関しては、「母は不在で作り置きの夕食だけがある」といった存在文のような意味合いを持つ。これは、「作り置き」が「V1ながらV2する」という動作の付帯を表して「作りながら置く」と解釈されるのではなく、「～を作ってから置いておく」という意味を持つからである。したがって、「作り置き」は複合動詞であっても複合動詞内において時間と動作の展開

が生じていることから、一時点の動作を表すことができず動態的な事態として認識することができないと考えられる。

- (14) a. ???母が夕食を作り置きだ。  
b. 母が夕食を作り置きしている。

### 3-2 時間の経過により変化する状態

本節では、時間の経過により失われる状態、つまり一次的な状態を表す事例について考察する。益岡(2008)、影山(2012)は、事象叙述文は時間の推移によって展開(発生・継続・終了)する出来事や状態を表す文であると述べている。(15)(16)(17)が時間の推移により展開する状態を表すことは、(18)(19)(20)の下線部に示したように時間的な副詞と共起できることから示される。

- (15) このパンは焼き立てだ。  
(16) 太郎は病み上がりだ。  
(17) 私は寝起きだ。  
(18) このパンちょうど焼き立てだから買って帰ろう。  
(19) 太郎はまだ病み上がりだから無理はさせられない。  
(20) 今、寝起きだから頭が朦朧としている。

これら「焼き立て」「病み上がり」「寝起き」は、「\*焼き立てる」「\*病みあがる」「\*寝起きる」を容認できないが、活用が失われているといっても典型的な名詞とも判断されず、時間の推移によって展開する。この観点からみると名詞性はそれほど高くなく、属性(恒常的・非恒常的)を表すこともできない。また、「焼き立て」「病みあがり」「寝起き」は、ある特別な一次的状態を表す。「焼き立て」に対する「焼き立てではない状態」、「病みあがり」に対する「病みあがりではない状態」、「寝起き」に対する「寝起きではない状態」になるには時間の推移のみが影響し、動作主などを必要としない。したがって、これらは有標的な状態であると考えられる。そして、これら有標的な状態ではない状態を取り立てて表す表現も見あたらない。このことから、このような状態は静態的の意味に近い意味を持つと考えられる。しかし、状態の中にも動作主の動作の介入により変化する状態もある。次節ではそのような事例について考察する。

### 3-3 意志的な動作により変化する状態

本節では、意志的動作により変化する状態を表す名詞述語文について考察する。(21a)の「売切れ」、(22a)の「食べかけ」、(23a)の「作りかけ」は、主語位置にある事物の状態を示して

いる点では3-2節で述べた時間の経過により変化する状態と共通している。しかし、本節で扱う状態は、動作主により意志的動作が加えられてその状態が変化する点で異なる。

以下、具体例を検討する。(21a)では、除菌グッズが売り切れの状態であったのを動作主が発注することで(21b)の状態に変化する。(22a)はケーキが食べかけの状態であったのが、動作主が食べることで(22b)に変化する。(23a)についてもマスクが作りかけの状態であったのが、動作主の作成作業によって(23b)に変化する。このような例は、時間軸上でのある一時点を表している。そして、ある一時点に焦点を当てその状態を表す。この点が3-2節で扱った有標の状態を表している例とは異なる。時間軸上のどの時点に焦点をあてても意味的に有標と無標の区別は生じないことから、事象叙述に近い状態を表している。

次に、語種の観点からも意味的な分化がみられることを指摘しておく。「売り切れ」「食べかけ」「作りかけ」は和語で構成されており、「入荷」「完食」「完成」は漢語である。動作の途中である場合には和語が使用されており、動作の結果には漢語が使用されている点にも注目すると、語構成が文の意味に与える影響も指摘することができる。

- (21) a. 除菌グッズは売り切れた。  
b. 除菌グッズが入荷だ。
- (22) a. ホールケーキは食べかけだ。  
b. ホールケーキを完食だ。
- (23) a. マスクは作りかけだ。  
b. マスクが完成だ。

また、(21a)と(21b)、(22a)と(22b)、(23a)と(23b)は、一連の出来事として表すことが可能であり、(24)(25)(26)のように一時点の状態からの変化を動的に表すことが可能である。このことから、3-2節で考察した時間の経過によって変化する状態とは区別されるべき意味を持つことがわかる。

- (24) 売り切れだった除菌アルコールが入荷だ。
- (25) 食べかけだったホールケーキを完食だ。
- (26) 作りかけだったマスクが完成だ。

### 3-4 名詞述語文の静態的意味のまとめ

第3節では、名詞述語文が表す静態の意味として、①恒常的属性、②非恒常的属性、③状態として「時間の経過で変化する状態」と「動作主の意志的な動作により変化する状態」の4つのタイプがあることを指摘した。内容を表1にまとめて示す。

①恒常的属性は、名詞述語文の主語位置にある事物を時間の経過で変化しないものとして述部で範疇化する場合である。②非恒常的属性は、時間の経過により変わり得る属性を表す場合である。用例として、述部が複合動詞のものではないが(6)(7)、後述の(46c)(47c)が挙げられる。

③状態については2つに分類した。1つは、③-1「時間の経過で変化する状態」であり、もう1つは、③-2「動作主の意志的な動作により変化する状態」である。前者は動作主による意志的な動作が働かずに変化する状態であり、ある状態から時間の経過によって状態が変化しても、その状態を取り立てて言い表す表現がない場合である。例えば、「焼き立て」、「病みあがり」、「寝起き」のようにある一時点の状態だけが有標的である場合である。後者は、時間の経過だけでなく動作主の意志的な働きかけによって変化する可能性がある状態で、時間軸上でのある一時点に焦点を当てその状態を表す。この場合は、時間軸上のどの時点を取り出しても意味的に有標と無標の区別は生じず、事象叙述に近い状態を表していると考えられる。

表1 名詞述語の静態的意味機能の分類

| 意味機能                     | 用例              | 備考                                     |
|--------------------------|-----------------|----------------------------------------|
| ①恒常的属性                   | (9a)(10a)(11a)  | 動詞の語義により文脈によっては動態の意味も表す。               |
| ②非恒常的属性                  | (6)(7)          | 時間の経過で変化し得る属性を表す。                      |
| ③-1. 時間の経過で変化する状態        | (15)(16)(17)    | 時間の経過で変化した状態については言い表す表現がないという点で有標的な状態。 |
| ③-2. 動作主の意志的な動作により変化する状態 | (21a)(22a)(23a) | 一連の出来事の一時点を表す。                         |

2つの状態の差異について、図を用いて説明する。「時間の経過で変化する状態」というのは、図1に示すように時間の推移により消滅する状態であり、時間が経過した先に展開される状態は存在せず、一次的な有標的状态である。「動作主の意志的な動作により変化する状態」は、図2に示すように時間の推移だけでは変化せずに、動作主による意志的な動作により展開する可能性のある状態である。この場合は、どの時点を取り出しても有標的な意味合いはなく意味的には均衡する。両者の違いは、動作性の介入の有無と状態の有標的意味の有無にある。本稿では、状態を静態的意味に分類した。



図1 時間の経過で変化する状態



図2 動作主の意志的な動作により変化する状態

## 4. 名詞述語文の動態的意味

### 4-1 中立叙述

本節では、名詞述語文が表す動態的意味である中立叙述性について議論する。中立叙述文(久野 1973)は、(27)のような文のことを指し、「命題全体が新情報となる場合すなわち文焦点になる場合である(下地 2019: 3)」と説明される。下地(2019)によると、文焦点は情報構造が前提部と焦点部に分かれておらず全て新情報を提示する文でしか生じないため実際の談話における出現は限られている。下地(2019)が挙げている文焦点の文は、(28)のようなものである。下地(2019)では、主格表示と主題表示の関係について、「ガは主語であることを標示する格標識であると同時に、主題解釈を回避するための脱主題化標識である(下地 2019: 11)」と主張している。

下地(2019)の(27)(28)については、(27)が「非ノダ文」であり、(28)が「ノダ文」であることから、同一条件に位置する用例ではないため、文焦点と中立叙述を同一と捉えてよいものかどうかは検討の余地がありそうである。しかし、本稿ではそのような議論には立ち入らずに話し手によって視覚的、聴覚的に認識した事象を描写的に表すものを中立叙述と考えて議論を進めることにする。

(27) 親父が酒を飲んでいる。(下地 2019: 3)

(28) 電話で「何か騒がしいけどどうしたの?」と聞かれて

親父が酒飲んでるんだよ。(下地 2019: 4)

中立叙述は通常、動詞述語文に生じると考えられてきたが、本稿では名詞述語文においても中立叙述が生じることを主張する。(29a)(30a)は文焦点(下地 2019)であり、全て話し手の認識した事象である。

これらの例を主題化すると、(29b)は不自然になるが、(30b)は話し手と「みんな」の対比の意味が生じる。つまり、(30b)では、「私は泣いたり笑ったりしていないけど、みんなは泣いたり笑ったりしている」という意味合いになり(30a)とは文の意味が異なる。この点で(30b)は文焦点(中立叙述)ではなくなる。つまり、話し手が認識した事象を述べる際、動詞述語文で動作主をガ格で標示すると同様に、名詞述語文も主語をガ格標示した場合は動態的意味(中立叙述の意味)が生じる。

(29) 【電話で「何か騒がしいけどどうしたの?」と聞かれて】

a. テレビを観ている太郎が笑っぱなしで…。

b. ??テレビを観ている太郎は笑っぱなしで…。

(30) 【電話で「何か騒がしいけどどうしたの?」と聞かれて】

a. 友達が家に集まってホラー映画を観ていてみんなが泣き笑いなの…

b. 友達が家に集まってホラー映画を観ていてみんなは泣き笑いなの…

また、話し手が何かを「発見」した場合の新情報においても名詞述語文による中立叙述の意味が生じる。(31)(32)は話し手の事態の認識によって名詞述語文の形式で表される中立叙述文である。

(31) 【騒がしいので外をみると】

川で濁流にのまれた人が溺れかけだ。

(32) 【子供が初めて歩きそうな瞬間をみて】

(子供が)つかまり歩きだ。

#### 4-2 過去・非過去における事象と習慣的事象

本節では、過去・非過去における事象と習慣的な事象を表す複合動詞について検討する。

最初に過去・非過去のある時点で発生した出来事を述べる事象叙述について検討する。複合動詞が転成して動態的意味が生じる場合には、中立叙述の他に過去のある一時点での出来事を

述べる場合がある。(33a)(34a)では、非過去と過去においての一連の出来事を表す。出来事の述べ方に関しては、名詞述語文では出来事を淡々と述べ立てるような述べ方となる、しかし、(33b)(34b)に示すように動詞述語文にすると話し手の主観性(話し手の意志や感情)が表れる。

- (33) a. 2時から取引先との話し合い {です/でした}。  
b. 2時から取引先と話し合い {ます/ました}。
- (34) a. 帰国してから2週間はホテルに泊まり込み {です/でした}。  
b. 帰国してから2週間はホテルに泊まり込み {ます/ました}。

次に、習慣的な事象を表す複合動詞について検討する。「住み込み」「見舞い」「(アイドルなどの)追っかけ」「(宴会やパーティーなどの)打ち上げ」などは、繰り返される動作や出来事を表す複合動詞である。これらは、(35a)(36a)(37a)(38a)のように「-ている」の形式にする和不自然になる。(35b)(36b)(37b)(38b)の名詞述語文のほうが自然である。

- (35) a. ??太郎は店の2階に住み込んでいる。  
b. 太郎は店の2階に住み込みだ。
- (36) a. ??花子は入院中の友人を見舞っている。  
b. 花子は入院中の友人の見舞いだ。
- (37) a. ??京子はアイドルグループを追っかけている。  
b. 京子はアイドルグループの追っかけだ。
- (38) a. ??無事に千秋楽を迎えスタッフ・キャスト一同で打ち上げている。  
b. 無事に千秋楽を迎えスタッフ・キャスト一同で打ち上げだ。

以上のように、名詞述語文においても事象叙述の意味が生じることを本節では主張した。次節では、名詞述語文の意味機能はどのような要因により生じているのかについて検討する。

## 5. 名詞述語となる複合動詞と文意味

本節では、第3節、第4節において取り上げた名詞述語文の述部と文の意味機能についてどのような条件で静態の意味や動態の意味に傾くのかを検討する。

第3節、第4節でみてきたように、〈V1+V2〉型の転成名詞の中には、完全に名詞として働き動詞としての機能をもたないもの(活用が失われているもの)と、名詞として機能しながらも動詞としての機能をもつもの(活用するもの)とがある。

〈AがBだ/です〉〈AはBだ/です〉という形式の文の述語が複合動詞由来の転成名詞のとき、

3つの要因が名詞述語文の意味機能の弁別（静態性と動態性の間での傾き）に関わると考えられる。1つは、先に述べた〈V1+V2〉におけるV2の活用の有無である。2つ目は、V1の自動詞と他動詞の区別である。以下、自動詞を「Vi」他動詞を「Vt」のように記す。3つ目は、〈V1+V2〉のV2が補助動詞であるか本動詞であるかという区別である。本稿では、〈V1+V2〉のV2が自立的であるか否かによって本動詞と補助動詞を区別する。自立的であるものは本動詞であり非自立的であるものは補助動詞であるとする。以下では、これらの観点から分析をして名詞述語文における述部の複合動詞と文の意味との関係を明らかにする。

### 5-1 Vt+補助動詞の非活用型と Vt+補助動詞の活用型

本節では「作りたて」「干しっぱなし」のような複合動詞〈V1+V2〉型のV1が他動詞でV2が補助動詞であり活用しない場合と「すりおろし」「書き込み」「飲みすぎ」のように活用する場合について検討する。

〈Vt+補助動詞〉の非活用型は、(39a)(40a)のように活用すると非文となる。そして、他動詞は通常2項とれるが名詞述語文において同時に2項とれるものととれないものがある。このタイプの複合動詞のV1の他動詞は、動作主を主語標示して名詞述語にすることができない(39b)と文脈により動作主を主語標示できる(40b)に分けられる。目的語に関しては(39c)(40c)のように目的語を主語にして名詞述語にすることができる。言いかえるとヲ格をガ格に昇格させて動作主を削除することで名詞述語文を形成することができる。このように形成された名詞述語文の意味は、静態的意味な意味を持つ。

- (39) a. \*母が夕食を作りたてる。  
       b. \*母が作りたてだ。  
       c. 夕食が作りたてだ。
- (40) a. \*花子が洗濯物を干しっぱなし。  
       b. #花子が干しっぱなしだ。  
       c. 洗濯物が干しっぱなしだ。  
       d. 花子が洗濯物を干しっぱなしだから取り込んでおいた。

次に(39c)(40c)の意味についてさらに検討する。これら名詞述語文は静態的な意味を持つが、この意味を下位分類することができる。「作りたて」のような場合は、第3節で述べた「時間の経過で変化する状態」であり、「干しっぱなし」については第3節で述べた「動作主の意志的な動作により変化する状態」である。この違いについては、動作の介入により事態が展開する(40d)が容認されることから説明ができる。「干しっぱなし」は、文脈によっては動作主を主格標示することができるため、名詞述語文の述部となった場合に「動作主の意志的な動作

により変化する状態」という意味が生じる。つまり、複合動詞の構成要素が持つ語義も文の意味に作用している。

次に、〈V1+V2〉のV1が他動詞でV2が補助動詞であり、活用する場合について検討する。〈Vt+補助動詞〉の活用型は、当然のことながら(41a)(42a)(43a)のように動詞述語文の述語となる。そして、〈V1+V2〉のV1が他動詞であることから、動作主と目的格の2項をとる。そのため、名詞述語文においては主語が動作主の場合と目的格の場合が想定されるが、振る舞いには2つのタイプがある。

1つ目のタイプについて検討する。(41a)(42a)は、動詞述語文であり事象叙述文である。これらは、(41b)(42b)のように名詞述語文において動作主が主語になると特定の文脈を設定しない限り不自然になり、(41c)(42c)のように目的格が主語になると静態の意味が生じる。この時、目的語をガ格標示すると容認度が下がり、「は」で主題化すると自然になることから(41c)(42c)は、恒常的属性叙述を表すことがわかる。

- (41) a. 太郎が大根をすりおろす。  
b. #太郎がすりおろした。  
c. 大根 {??が/は} すりおろした。
- (42) a. 花子がコメントを書き込む。  
b. #花子書き込みだ。  
c. コメント {??が/は} 書き込みだ。

もう1つのタイプは、(43a)のように、動詞述語文において事象叙述というよりは、眼前描写性が失われた静態の意味、属性叙述に傾く場合である。このタイプは、(43b)のように名詞述語文において動作主が主語であることが容認され、このときに事象叙述としての解釈が可能となる。そして、(43c)のように目的格が主語になると非文となる。(43c)は、(43d)のようにヲ格標示にすると容認され、述語の動作内容を表す意味が生じる。

- (43) a. 花子がコーヒーを飲みすぎる。  
b. 花子が飲みすぎだ。  
c. \*コーヒーが飲みすぎだ。  
d. コーヒーを飲みすぎだ。

## 5-2 Vi+補助動詞の非活用型と Vi+補助動詞の活用型

本節では、〈V1+V2〉のV1が自動詞でV2が補助動詞である場合について検討する。

まず〈Vi+補助動詞〉のV2が活用しない複合動詞の例を検討する。〈Vi+補助動詞〉の非活

用型には、「泣きっぱなし」「歩き通し」などがある。(44a)(45a)が非文であるように動詞述語文にはできず、(44b)(45b)のような名詞述語文であれば容認可能である。これらは、V1が自動詞であるため、名詞述語文の主語として動作主のみが配置される。そして、意味的には動態性に傾いており、中立叙述として動態的意味を表す。

- (44) a. \*赤ちゃんが泣きっぱなし。  
       b. 赤ちゃんが泣きっぱなしだ。  
 (45) a. \*登山客が歩き通す。  
       b. 登山客が歩き通しだ。

次に、〈Vi+補助動詞〉の活用型の複合動詞の例を検討する。(46a)(47a)(48a)(49a)は、動詞述語文であり、「悩みすぎ」「焦りすぎ」「座り込み」「飛び出し」は活用することができる複合動詞ではあるが、〈V1+V2〉のV1に置かれる自動詞に意志性が関与するか否かで振る舞いに違いがみられる。

〈V1+V2〉のV1に意志性が関与しない自動詞が置かれた場合を検討する。(46b)(47b)は、第3節で述べた「時間の経過で変化する状態」を表す。「悩み」「焦り」などは自然に発生するものであり、意志的にはコントロールしにくいことである。また、「悩みすぎ」「焦りすぎ」を解消しようと「悩まない」「焦らない」と意識したとしても実際に実現するとも限らない。そして、(46a)(47a)の動詞述語文も状態を表わすと考えられる。

ところが、(46c)(47c)のように主題表示「は」の名詞述語文になると異なる意味が生じる。(46c)(47c)は、個人の性格についての属性を表す解釈が可能になる。つまり、主語をガ格で表すと「時間の経過で変化する状態」であり、「は」で主題化することで個人の性質を表す意味合いが生じて非恒常的属性叙述に近づく。

- (46) a. 花子が悩みすぎる。  
       b. 花子が悩みすぎだ。  
       c. 花子は悩みすぎだ。  
 (47) a. 太郎が焦りすぎる。  
       b. 太郎が焦りすぎだ。  
       c. 太郎は焦りすぎだ。

次に、〈V1+V2〉のV1に意志性が関与する自動詞が置かれた場合を検討する。(48a)(49a)は事象叙述文であると解釈できる。そして、(48b)(49b)のように名詞述語文に書き換えても事象叙述的解釈が生じる。これら名詞述語文を(48c)(49c)に示したように主題文にすると不自

然になることから事象叙述性が高いと考えられる。

自動詞に意志性があると主題文を形成しにくいことが、意志性のない自動詞と異なる。このことは、意志性をもつ自動詞が名詞述語文の述語になると、事象叙述としての解釈が生じる現象を支えていると考えられる。

- (48) a. デモの参加者が座り込む。  
b. デモの参加者が座り込みだ。  
c. #デモの参加者は座り込みだ。
- (49) a. 自転車が飛び出す。  
b. 自転車が飛び出した。  
c. #自転車は飛び出した。

しかし、実際の言語現象として (48b) (49b) が発話されることはあまりない。事象叙述として発話されるならば、(50) (51) のような場合が想定される。つまり、事象叙述として発話するときは、動作主をガ格標示するよりも、〈N1 の N2〉形式の連体修飾句として示すほうが自然になる。そして、(50) (51) は、事象叙述といっても過去の事象について述べるときに連体修飾句を使用すると自然であるということも示している。このような現象が起きる要因は、〈Vi+補助動詞〉が活用する場合は動詞述語文を形成することができるため、(52) (53) のように動作主をガ標示することで中立叙述を表すことができる点にある。

- (50) 「何の騒ぎですか？」と聞かれて  
デモの参加者の座り込みがあったようです。
- (51) 「事故ですか？」と聞かれて  
自転車の飛び出しがあったようです。
- (52) デモの参加者が座り込んだ。
- (53) 自転車が飛び出した。

### 5-3 Vt+本動詞の非活用型と Vt+本動詞の活用型

本節では、〈Vt+本動詞〉について検討する。〈Vt+本動詞〉については、複合動詞を構成する V1 と V2 における意味関係の影響により文の意味が生じていることを指摘する。

〈Vt+本動詞〉の非活用型である「作り置き」は V1 の他動詞が 2 項動詞で軽動詞「する」ともない (54a) のように動作主と目的語の両項を用いることができる。そして、(54a') のように活用すると非文になる。また (54b) の名詞述語文は不自然である。(54c) に示すように、1 項のみをとり動作主が主語の場合にはガ格よりも連体修飾句として属格ノを使用する方が自然

である。そして、目的格が主語となる場合は、(54d)のようにガ格にすると不自然で「は」により主題化すると自然になり非恒常的属性叙述文となる。したがって、「作り置き」という複合動詞が名詞述語文の述語となった場合は動作主が主語とならず、目的語が主語となり静態的意味を表す。

- (54) a. 母が夕食を作り置きする。  
 a'. \*母が夕食を作り置く。  
 b. ???母が夕食を作り置きだ。  
 c. 母 {??が/の} 作り置きだ。  
 d. 夕食 {??が/は} 作り置きだ。

しかし、同じ〈Vt+本動詞〉の非活用型である「試し書き」は、「作り置き」とは異なる振る舞いをみせる。(55a)動詞述語文と(55b)名詞述語文は自然である。(55c)のように動作主だけが主語になるとガ格は自然である。しかし、「は」により主題化すると不自然となり動作主のガ格標示によって動態的な意味が生じる。そして、(55d)のように目的語が主語となる場合においてヲ格がガ格に昇格すると非文となり、主題化すると不自然になる。したがって、名詞述語文における「試し書き」に関しては、動態的意味の事象叙述を表す。

- (55) a. 客がペンを試し書きする。  
 b. 客がペンを試し書きだ。  
 c. 客 {が/??は} 試し書きだ。  
 d. ペン {\*が/??は} 試し書きだ。

以上から、〈V1+V2〉の複合動詞においてV2が本動詞の場合には、語構成が要因となり文意味に影響が及んでいるとは言い難く、この点はV2が補助動詞である場合と異なる。では、このような現象が起きるのはなぜだろうか。それは、V1とV2が共に自立的な動詞であることによって、前後の動詞の間に意味関係が発生することに要因がある。つまり、「作り置き」は「作ってから置く」という時間の幅がV1とV2の間にあり、一時点で認識できる動作ではない。「試し書き」は、「試す目的で書く」「試しながら書く」のように解釈されるため「書く」という動作を表すことに変わりはなく、その様子は一時点で認識でき、眼前で描写され得る動作である。

一方で、先に検討したV2が補助動詞である複合動詞は、V2は意味的にV1に取り込まれており、V2には自立性がなくV1と結合度が高いことから、V1の自動詞と他動詞の区別やV2の活用の有無が文の意味に関わっていると考えられる。この仮説に基づいて、以下〈Vt+本動詞〉活用型についても検討する。

〈Vt+本動詞〉のV2が活用するものには、「食べ歩き」「売り切れ」などがある。これらは複合動詞V1とV2の意味関係の観点から、2つに分けられる。1つは、〈V1ナガラV2〉型でV1とV2の動作が同時進行であるタイプであり、もう1つは、〈V1テ(カラ)V2〉型でV1とV2の動作に時間的な差が生じるタイプである。

〈V1ナガラV2〉型(同時進行タイプ)についてみていく。このタイプは、一時点での出来事を認識できるため事象叙述解釈が可能となる。(56a)の動詞述語文において「たらふく」という連用修飾要素となる副詞があるが、この副詞は名詞述語文である(56b)においても述部との共起が可能である。また、(57)のように複合語の一部となり、属性叙述を表すこともできる。つまり、統語環境によって静態的な意味から動態的な意味範囲を表す。

- (56) a. 太郎が夜市でたらふく食べ歩く。  
b. 太郎が夜市でたらふく食べ歩きだ。

(57) 中華街は食べ歩きスポットだ。

次に〈V1テ(カラ)V2〉型(時間差タイプ)についてみていく。このタイプは、複合動詞のV1とV2の動作の間に時間的な差が生じ一時点の出来事としては認識することができないため属性叙述を表す。「売り切れ」は「Aヲ売ってAガ切れる」というように分析され、V1とV2に意味的時間差だけでなく格のズレも生じている。このタイプの複合動詞は(58a)の動詞述語文におい非過去の事象を表し、(58b)の名詞述語文において状態を表す。これらは先述した「動作主の意志的な動作により変化する状態」である。

- (58) a. 日本中で除菌アルコールが売り切れる。  
b. 日本中で除菌アルコールが売り切れだ。

#### 5-4 Vi+本動詞の非活用型とVi+本動詞の活用型

本節では、〈vi+本動詞〉の複合動詞について検討する。本節においても前節と同様に、複合動詞における動詞の意味の関係から述部となる複合動詞と文の意味について検討する。

まず〈Vi+本動詞〉の非活用型について検討する。このタイプの複合動詞のV1とV2の意味関係は、主に〈V1ナガラV2〉型と〈V1タリV2タリ〉型に分けられる。これらは一時点の出来事として認識できるため事象叙述解釈が可能である。しかし、文脈によって静態の意味も表わす。

〈V1ナガラV2〉型と〈V1タリV2タリ〉型の例を検討する。(59)(60)は、動作主をガ格で主語標示しており、一時点の出来事として認識できる事態である。また(61)(62)においても同様に事態を表している。つまり(59)~(62)は事象叙述文である。ただし、先述したように

文脈によっては、(63)(64)のように属性叙述を表す。

- (59) 太郎が立ち漕いだ。
- (60) 7か月の子供がつかまり歩きだ。
- (61) 乗客が乗り降りだ。
- (62) 太郎が泣き笑いだ。
- (63) 電動スケートボードは立ち乗りだ。(再掲(9))
- (64) この居酒屋は立ち飲みだ。(再掲(10))

次に、〈Vi+本動詞〉の活用型について検討する。この場合、複合動詞のV1とV2の意味関係が(65)のように〈V1ノ結果V2ニナル〉型という結果を表すタイプがある。このタイプは一時点の出来事として認識しにくい「時間の経過で変化する状態」を表す。(66)「立ち会い」のような場合には、V1とV2の意味関係が〈V1ナガラV2〉型となり(66)は事象叙述としての解釈が生じる。

- (65) 夏毛が冬毛に生え変わりだ。
- (66) 太郎が妻の出産に立ち会いだ。

## 5-5 名詞述語文の述語となる複合動詞のまとめ

本節では、名詞述語文の述語を形成する複合動詞由来の転成名詞を語構成と動詞の意味に着眼して分析した。そして、これら名詞述語文が表す文の意味と述部の関係を考察した。全体的に言えることとしては、複合動詞〈V1+V2〉のV2が補助動詞であるのか、本動詞であるのかによって文の意味への影響の仕方が異なるということである。

V2が補助動詞の場合について表2にまとめた。複合動詞を形成するV1の自動詞と他動詞の区別によって、文意味への作用の仕方に違いがある。

V1が他動詞の場合の結論を述べる。V1が他動詞であると他動詞が要求する2項がそれぞれ名詞述語文の主語となる可能性があるが、対応する動詞述語文がない場合、動作主が主語となりにくく、目的語が主語になると状態を表す。例として(39c)(40c)をあげた。また、対応する動詞述語文がある場合は、動詞述語文が事象を表すと名詞述語文が属性叙述を表し、動詞述語文が属性叙述を表すと名詞述語文が事象叙述を表す。

V1が自動詞の場合の結論を述べる。V1が自動詞でV2が活用しない場合は、対応する動詞述語文がなく、名詞述語文が中立叙述を表す。そして、V2が活用する場合は、V1が意志的な動詞であるのか非意志的な動詞であるのかが影響している。V1が意志的であると動態性は生じるものの過去のある時点での出来事として解釈するほうが自然である。V1が非意志的であ

ると静態的な意味，状態性が生じる。動詞述語文と名詞述語文が形成され文の意味が近似する点は V1 が他動詞の場合と異なっている。

表2 5-1 節と 5-2 節のまとめ

| V1 の自動詞・他動詞 | V2 の活用の有無 | 名詞述語文の意味   | 動詞述語文の意味 |
|-------------|-----------|------------|----------|
| 他動詞         | 無し        | 状態（目的格が主語） | ×        |
| 他動詞         | あり        | 属性         | 事象       |
| 他動詞         | あり        | 事象         | 属性       |
| 自動詞         | 無し        | 事象（中立叙述）   | ×        |
| 自動詞（意志性あり）  | あり        | 事象         | 事象       |
| 自動詞（意志性なし）  | あり        | 状態/属性      | 属性       |

V2 が本動詞の場合の結論を述べる。この場合，V2 が補助動詞の場合とは異なり V2 の自立性によって V1 と V2 の意味関係が生じ文の意味に作用している。本稿では，〈V1 ナガラ V2〉型，〈V1 テ（カラ）V2〉型，〈V1 タリ V2 タリ〉型，〈V1 ノ結果 V2 ニナル〉型があることに触れた。そのうえで，事態を一時点で認識できる〈V1 ナガラ V2〉型，〈V1 タリ V2 タリ〉型と事態を一時点で認識できない〈V1 テ（カラ）V2〉型，〈V1 ノ結果 V2 ニナル〉型に区別できることを指摘した。前者のタイプの複合動詞が述語になると動態の意味が生じ，後者のタイプの複合動詞が述語になると静態の意味が生じる。

## 6. 結論

本稿は，名詞述語文において属性叙述に解釈されるものと事象叙述に解釈されるものが存在するのはなぜかという問いに対して，名詞述語文の述部が複合動詞である例を対象に，語構成と主語標示の観点から分析・考察した。その結果，名詞述語文の意味に作用する要因が述部の複合動詞〈V1+V2〉における V1 の自動詞・他動詞の区別，V2 の活用の有無，V2 の本動詞と補助動詞の区別，さらに主語標示にあることを主張した。

また，文の意味（叙述の種類）として①恒常的属性，②非恒常的属性，③状態の「1. 時間の経過で変化する状態」「2. 動作主の意志的な動作により変化する状態」を静態の意味に分類した。そして，動態の意味は中立叙述，過去・非過去における事象，習慣的事象に分類した。

複合動詞の構造と文の意味の関係は，複合動詞〈V1+V2〉の V2 が補助動詞であるのか，本動詞であるのかによって異なり，V2 が補助動詞である場合には動詞形態と語構成が文の意味に与える影響が強く，本動詞の場合は V1 と V2 の意味関係が文の意味に影響することがわかった。

本稿では，複合動詞が転成名詞となる条件については議論することができなかったため，今

後分析を進める必要がある。また、日本語の複合動詞は豊富であるため今回の議論では不十分な点があり検討の余地を残した。今後より多くの事例を検討したうえで複合動詞を用いた名詞述語の形成と文の意味との関わりについて議論を集約したいと考えている。

(なかむら まいか・言語文学専攻)

## 参考文献

- 影山太郎 (2012) 「属性叙述の文法的意義」 影山太郎 (編) 『属性叙述の世界』 pp. 3-35 くろしお出版
- 加藤重広 (2016) 「統語語用論」 加藤重広・滝浦真人 (編) 『語用論研究法ガイドブック』 pp. 159-185 ひつじ書房
- 久野暲 (1973) 『日本語文法研究』 大修館書店
- 佐久間鼎 (1941) 『日本語の特質』 育英書院
- 下地理則 (2019) 「現代日本語 (口語) における主語の格標示と分裂自動詞性」 竹内史郎・下地理則 (編) 『日本語の格標示と分裂自動詞性』 pp. 1-36 くろしお出版
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法』 くろしお出版
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』 くろしお出版
- 益岡隆志 (2004) 「日本語の主題：叙述類型の観点から」 中川正之・西光義弘・益岡隆志 (編) 『主題の対照』 pp. 3-17 くろしお出版
- 益岡隆志 (2008) 『叙述類型論』 くろしお出版
- 益岡隆志 (2016) 「叙述の類型と名詞文の構造」 福田嘉一郎、建石始 (編) 『名詞類の文法』 pp. 215-232 くろしお出版
- 三上章 (1953) 『現代語法序説』 刀江書院